



《特集》

歴史がはぐくんだ技と手仕事、

本場大島紬の魅力

本場大島紬の起源は、1300年以前にさかのぼり、わが国で最も長い歴史と伝統をもつ織物の一つです。

本場大島紬は、奄美大島を発祥とする絹織物ですが、県本土でも生産されるようになり、昭和50年には、国の伝統的工芸品の第一号として指定を受けました。

長い歴史がはぐくんだ技と伝統、職人の細やかな手仕事を追い、気品と光沢のある本場大島紬の魅力に迫ります。



本場大島紬の歴史

奄美の島々は、「海上の道の島」として、日本本土と南方や大陸との交易通路として重要な役割を果たしてきました。そのような中で、南北の文化の影響を受け、大島紬は生まれ、発達してきました。

中でも、奄美大島では、琉球の影響を受けて、昔からさまざまな材料で布が織られていました。養蚕の技術が伝わり、芭蕉糸と交織したり、身近な植物で染めたりと、縞や格子など自由な糸の組み合わせで布を織り上げていました。

やがて、奄美の自然に多いソテツやハブのうろこなど、複雑な模様の紬が作られ始めました。また、島に自生する植物、テーチ木（車輪梅）と鉄分の多い田の泥で染める独特の染色法「泥染」が生まれ、その色調と風合いの良



さから珍重される絹織物になり、薩摩藩への献上品として重用されました。大島紬が全国的に知られ、生産が伸び始めたのは、今から100年ほど前。生産が伸びるなかで、「しめぼた」が発案され、細かく美しい模様が作られるようになりました。さらに、織りばたも変化し、今と同じ「高ばた」になりました。



大島紬は、奄美大島の生活を支える産業として発展し、やがて奄美大島だけでなく、鹿児島市を中心とした県本土でも生産されるようになりました。

さらに、技術開発が進み、ますます進化した大島紬は、伝統的な泥大島や藍を交えて染める泥藍大島をはじめ、色大島や白大島など、色・柄・風合いのバリエーションが広がっています。

しかし近年、ライフスタイルの洋風化や、和装を着用する機会が減ったことなどから、需要が低迷し、昭和50年代をピークに、生産量・生産額とも大きく減少しています。さらに、技術者の高齢化や後継者不足による技術継承の課題も抱えています。

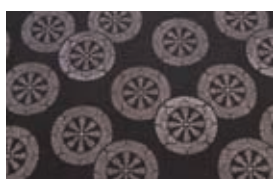
そこで、大島紬の振興を図ろうと、県や産地組合では、試着体験や現代のニーズに合った商品の開発、洋装やインターネット販売などへの製品化、インターネット販売、海外への展開など、さまざまな取り組みを行っています。

本場大島紬の特徴

大島紬は、独特の泥染の技法や緻密な柄模様が特徴の絹織物で、軽くて暖かく、しなやかで着崩れにくいという特徴があります。また、着込めば着込むほど肌なじみ着心地が良く、しわになりにくいことから、きもの愛好家にも大島紬ファンが多いのです。



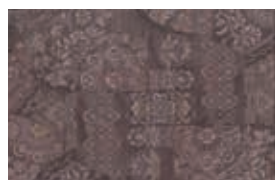
-白大島-



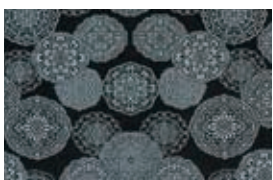
-泥染大島-



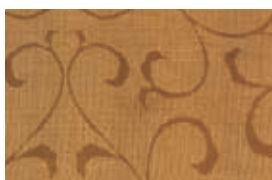
-泥藍大島-



-植物染大島-



-藍大島-



-色大島-

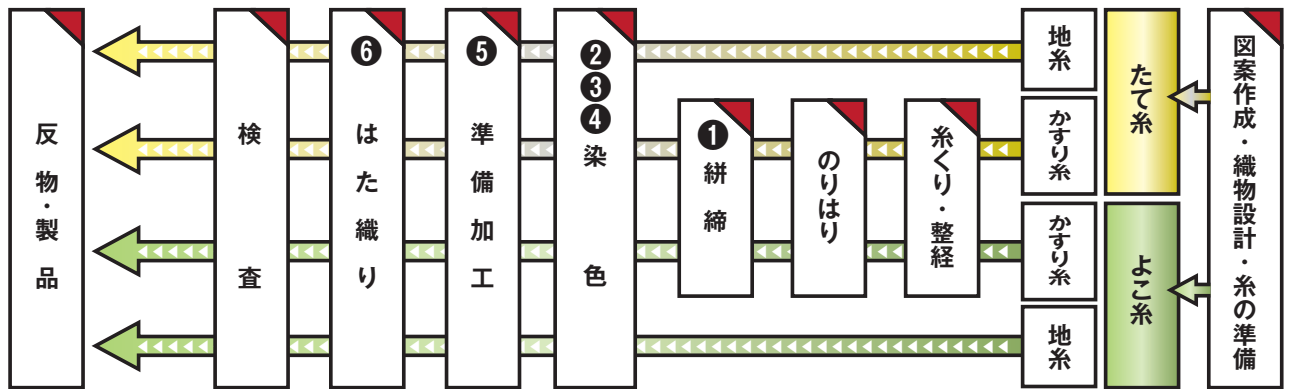
本場大島紬の製造工程

大島紬の工程は、約30工程あり、図案から織り上げるまで、半年近くかかります。一つ一つの工程が、非常に複雑で、高度な技術が求められます。

絹糸12〜16本を束ねてのりで固め、「しめばた」を使って、図案に合わせて、木綿糸で強く締めつけていきます(写真①**拵締**)。締めた部分は染まらないため、拵模様が生まれます。拵締は強い力を要することから、主に男性が行います。

次に染めの工程では、泥染の場合、テーチ木(車輪梅)を煮詰めた液(写真②)で染めた後、泥田で揉み込みます(写真③)。テーチ木のタンニンと泥田の鉄分が反応し、光沢のある漆黒へと染まります。色差しをする場合は、染める部分の木綿糸をほごき、染料をすりこんでいきます(写真④)。すべての染色が終わると、木綿糸をとり、絹糸を取り出し、たて糸を織機にかけ(写真⑤)、よこ糸をす(シャトル)に収めます。

織機を使い、たて糸とよこ糸を正確に合わせながら、緻密な模様を織り上げていきます(写真⑥)。



製造工程始まり

完成

自然の恵みに感謝して、泥染めの魅力を発信

大島紬の泥染めは、テーチ木の染料と泥で反応させ、川で泥を洗い流すという作業を100回近く繰り返します。そうして色が徐々に重なっけていき、紬特有の深みのある漆黒に染まっけていきます。

古来から伝わる伝統技法を守りながら、大島紬の魅力と、泥染めを多くの方に知っていただくために、染めの体験やワークショップを開催しています。島外からも多くの方が体験に来られ、着古した衣服やさまざまなアイテムを染め直し、泥染めで自分だけのオリジナル作品を作れるのが魅力です。最近では、サンゴの欠片や和紙などを染めて、オブジェとして染めの作品を制作しています。

これからも、常に自然に沿ったフラットな視点で、既成にないものと大島紬との両輪で、作品を生み出して、染めの魅力と伝統文化、奄美の自然や先人の知恵を発信していきたいですね。



有限会社金井工芸
染色家
かない ゆきひと
金井 志人さん



本場大島紬の振興を目指して

本場大島紬の普及や安定した需要を目指して、産地組合も積極的に活動しています。
長さ、緞の仕上がり、色合いなど20項目の厳しい検査に合格した反物だけに品質を保證する商標がつけられます。



〔 清泉女子大学でのキャンパスコレクション 〕

「本場大島紬大使に任命された宮下純一さん」



本場大島紬 織物協同組合

創立100周年を迎える本場大島紬織物協同組合では、新たに本県出身の北京オリンピックメダリストの宮下純一さんを本場大島紬大使に任命。

また、旧島津公爵邸にキャンパスを構える清泉女子大学（東京都品川区）における、学生の試着体験やワークショップなど、若い世代や県外への普及活動にも取り組んでいます。

問 電話 099(204)7550



〔 商標（旗印） 〕



〔 試着体験や、大島紬のハギレを使った小物づくり 〕

本場奄美大島紬 協同組合

本場奄美大島紬協同組合では、本場大島紬の発祥地ならではの活動を行っています。奄美の豊かな自然と風土がもたらす地域性を活かして、伝統技術を伝承する、技術専門学院を運営しています。

また、子どもたちの泥染め体験学習や、京都の西陣織とコラボレーションして合同展示会を開催するなど、普及啓蒙に積極的に取り組んでいます。

本組合のある奄美市では、昭和53年から毎年1月5日を「紬の日」と制定し、紬を着用して、本場奄美大島紬への認識を深める取り組みも行っています。

問 電話 0997(52)3411



〔 西陣織とのコラボレーション展示会 〕



〔 本場奄美大島紬技術専門学院 〕



〔 子どもたちの泥染め体験 〕



〔 商標（地球印） 〕